

平成23年度

水辺環境調査報告書（1）

新中川・葛西沖

【植物・鳥類】

はじめに

特定非営利活動法人えどがわエコセンターでは、江戸川区から業務委託を受け区内の河川（江戸川／荒川／新・旧中川／新川及び葛西臨海公園東なぎさ等）で確認できる生物（植物・鳥類・魚類・底生動物）について調査を行っています。

平成23年度は、新中川を調査しました。本報告書は全2分冊構成で、植物・鳥類が第1分冊、魚類・底生動物が第2分冊となっています。

1. 調査目的

この調査は、都市に残るかけがえのない自然が公害現象や無理な開発によって消滅することがないように現状を記録し、身近な自然環境に関する正確な情報を区民に公開すること、定点観測等によるデータを蓄積し、次世代の環境保全に役立たせることを目的に実施しています。

2. 調査区域

- 新中川（区内部分） ○東京湾（葛西臨海公園・東なぎさ）

3. 調査項目

- （1）植物 （2）鳥類

4. 調査日・調査方法

- 各々の調査につき2名の調査員とボランティアスタッフが同行しました。

（1）植物

中村 建爾（野生植物研究家）
渡辺 ヨシノ（江東植物愛好会会長）

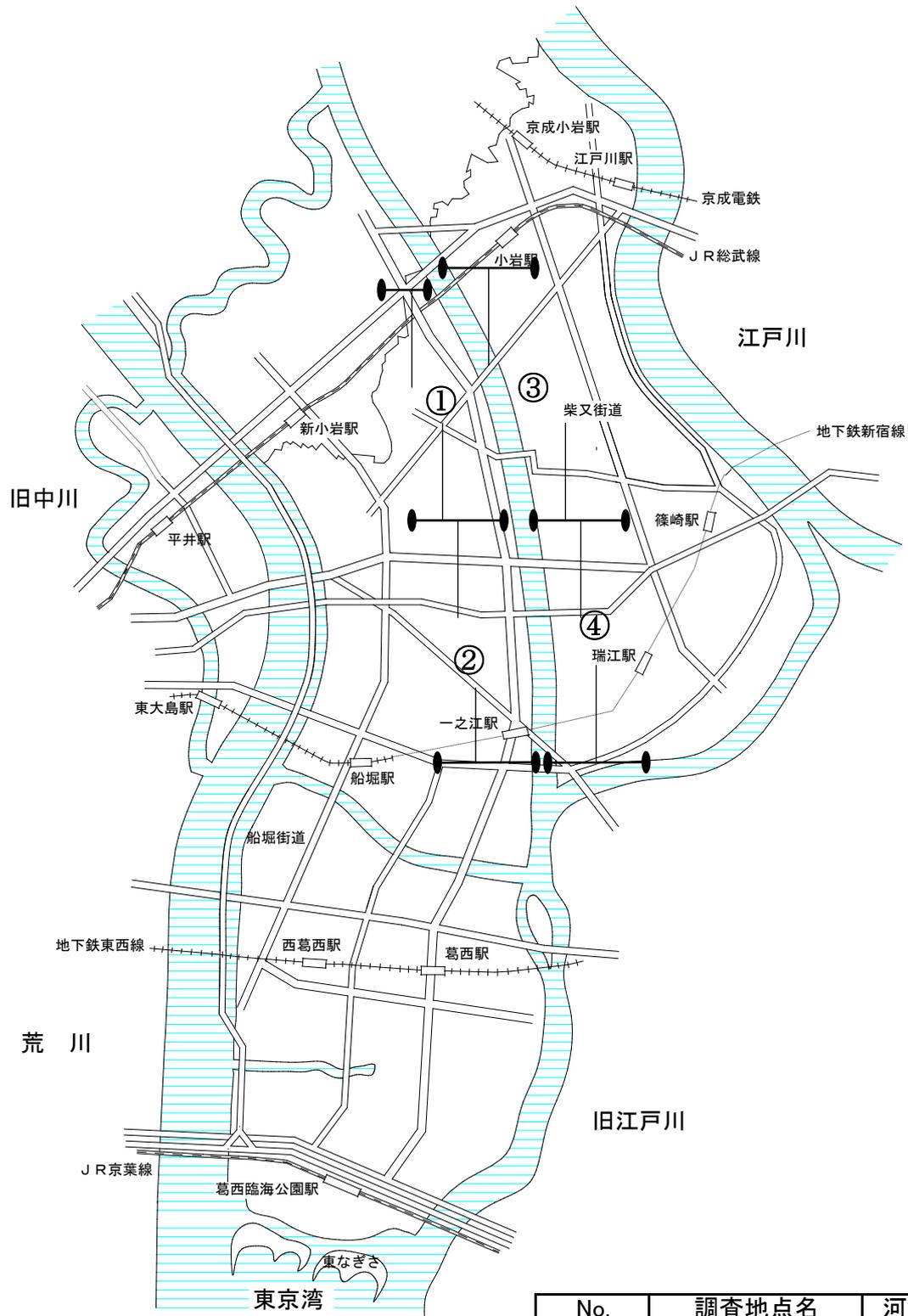
（2）鳥類

飯田 陳也（日本野鳥の会東京支部幹事）
長 文夫（葛西東渚・鳥類園友の会世話人）

- 区間ごとに出現種（鳥類は個体数を含む）を記録しました。

※ 図-1を参照

図1 - 調査地点図



No.	調査地点名	河川名
①③	上一色小学校前～大杉橋	新中川
②④	大杉橋～瑞穂大橋	新中川

表1—調査日・調査方法

調査項目	調査区域	調査日	方 法
植 物	新中川	5 / 11 (水)	上流と下流の2班に分かれ、河川敷の歩行調査を行う。区間ごとに分布状況、確認種を記録する。
		7 / 15 (金)	
		10 / 12 (水)	
	東なぎさ	9 / 14 (水)	東西2班に分かれ、歩行調査を行う。分布状況、確認種を記録する。
鳥 類	新中川	5 / 18 (水)	上流と下流の2班に分かれ歩行調査を行う。区間ごとに分布状況、確認種と個体数を記録する。
		1 / 18 (水)	
		東なぎさ	9 / 14 (水)

5. 調査結果

表2—調査結果

() は帰化種

調査項目	調査水域	調査日	結 果
植 物	新中川	5 / 11 (水)	61科 190種 (70)
		7 / 15 (金)	59科 164種 (61)
		10 / 12 (水)	60科 185種 (65)
		計	75科 283種 (97)
	東なぎさ	9 / 14 (水)	36科 86種 (24)
鳥 類	新中川	5 / 18 (水)	12科 18種 310羽
		1 / 18 (水)	11科 17種 579羽
		計	14科 26種 886羽
		東なぎさ	9 / 14 (水)

6. まとめ

植物/野鳥(新中川)

(1) 植物(新中川)

1) 春(5月11日) 左岸

総体的に水際は除草されていて植生は乏しい。

堤防の両側斜面についても川沿い(西側)より東側斜面の方が植物は多くみられる。

時期的に、チガヤなどが多いと予測していたが予想以上に少なく帰化種(ハルガヤ・ノヂシャ・アカバナユウゲショウ)の拡がりが見られた。

- 上一色小学校→辰巳新橋
ノヂシャの拡がりが見られる。
ヒメジョオン・アレチギシギシ・ヒメコバンソウが群生している。
- 辰巳新橋から下流
アカバナユウゲショウの拡がり水門まで見られた。
ハルガヤも土手一面に小岩大橋まで拡大群生している。
※下小岩第二小学校際土手にアオツツラフジが勢力的に群生している。
- 鹿骨小側土手
チガヤと入れ替わったようにハルガヤが拡大群生している。
コメツブツメクサの拡がりも目立っている。
- 大杉橋→椿橋
船の係留地、水際にヤセウツボ 100m以上 連続成育確認した。 他所では見られなかったのでシロツメクサに寄生しているものと思われる。
※瀬戸口公園近くの土手
クスダマツメクサ数株確認した。
3年前の調査の折、初めて確認したミミイヌナズナが拡がりを見せているが個体数はそれほど多くない。
- 椿橋→春江橋
スイバの花と、アカバナユウゲショウの花が土手一面に拡大群生している。
- 春江橋→瑞穂大橋工事のため調査不可

(渡辺)

2) 春(5月11日) 右岸

- 右岸全体的には区境～下流(水門)へ向かって植生は単調になる傾向である。
理由として、整地(シバなどの植え付け)やコンクリートで水際を固めてしまうなどの人為的な関わりが大変大きいと考える。このままでは、益々水際に残る植生を含めた生物の多様性のある環境は貧弱になっていくと考えられる。
- 区間①
区境付近の土手川の方に面した側の斜面の下に20～30メートルほどの長さにわたってナワシロイチゴが比較的多く成育していた。
昨今、どこでも少なくなり確認できないので、この状態を維持することが望ましい。

以前から上一色橋付近に見られるイヌドクサが数年前までは減少傾向にあったが今回は増え、安定した成育ぶりであった。原因は以前より強い刈り取りが無いのかもしれないと考える。この種類はどこにでも生える種ではないので大変貴重である。

次に、水辺よりの湿った場所はごく少ないが セリ・タガラシ・ケキツネノボタン・フトイ・ヒメガマ・シロネ・アゼナルコスゲなど本来の水辺環境の指標となる種類が確認できた。

・ 区間②

区間①よりさらに整備されているためか植物の種類的には単調である。

特記すべきものは、スズメノテッポウ（最近都会付近では、ごく少なくなった貴重種であるので今後の盛衰を注目していく必要がある）・スズメノエンドウ・タケニグサ・ヤセウツボ(マメ科やキク科に寄生する一年生の帰化植物)などである。

この時期に区間①②ともに多くみられる種類として、シロツメクサ・ヨシ・オギ・イタドリ・オオバコ・ヘラオオバコ・イヌムギ・ネズミムギ・スギナ・シロザ・セイタカアワダチソウ・ヨモギ・ウラジロチチコグサ・ギシギシ・スズメノカタビラ・カタバミ・カモジグサ などがある。さらに、区間①②を通して見られた樹木（木本植物）としてはアカメガシワ・アキニレ・ハリエンジュ・ピラカンサ・エノキ・ビワ・オニグルミ・クコ・クスノキ・タブノキ・トウネズミモチ・イヌコリヤナギ・ノイバラ・ノブドウ・フジ・マルバシャリンバイ・モッコク などである。

3) 夏（7月15日）左岸

・ 区間③

水辺はフェンスで遮られているがヨシやオギが2メートル位の幅で繁茂している。フェンスにはコヒルガオ・ヒルガオ・ヘクソカズラなどが多くからみついている状態で、フェンスの下と内側、川と反対側にはセイタカアワダチソウやヨモギが密生し、他の植物はほとんど入り込めないがわずかに空いた場所には、シロネが2～3株生育しているのが見られた。

上一色橋を過ぎたあたりからはオギの群落が200メートルほど続き、水辺の景観をなしている。水辺から土手までの平坦な人の踏みつける場所にはオオバコ・ヘラオオバコ・オヒシバ・メヒシバ・シロツメクサ・エノコログサなどで占められている。

この区間で特記すべき種類としては、ヒメガマ・ノブドウ・ミコシガヤ・クサヨシ・クサギ・ケキツネノボタンなどである。

なお、土手はちょうど刈り取られた後で残っている主な種類からチガヤ・オオバコ・シロツメクサ・ギシギシなどが優占していた。

・ 区間④

この区間も水辺に沿ってヨシが生育し、人の歩ける平坦な場所には、区間③と同様にシロツメクサ・オオバコ・エノコログサ・チガヤなど踏みつけに強い種類が多い。

南椿橋からは河川側にオオムラサキツツジの植栽が続き、その下にはヨモギ・スギナ・ネズミムギなどが多くみられ所々にアズマネザサが散生している状態である。

春江橋付近になると植栽されたオオムラサキツツジの上を覆うようにアオツヅラフジやヤブガラシ・カラスウリ・キカラスウリなどが比較的多く生育している。

特記すべき種類としては、ナワシロイチゴ・シロバナサクラタデ・ホシアサガオ・キカラスウ

リ・アオツツラフジなどである。通常アオツツラフジは山野に生えているが河川敷のような環境にみられる事は珍しいと思われる。

なお、この区間は区間③より人為的な影響が強く働き覚乱されてきた結果、植物の種類も少なく、本来水辺に生育する種類はヨシ以外に見られず植物を中心とした水辺環境は大変好ましくない状況であると考えられる。

(中村)

4) 夏 (7月15日) 右岸

猛暑が続き地面は極度に乾燥し、シロツメクサは除草剤で枯れたように黄色く枯死していた。オオバコは蒸散を防ぐためか、葉を丸めて葉裏を見せていた。この現象は今まであまり見ることがなかった状況である。

全体的に植物の種類も少なく開花している物も少ない。

上一色橋の上下あたりの堤防斜面にナワシロイチゴが繁茂し熟した赤い実をたくさんつけていた。キシウズメノヒエが群生し胞子のうもたくさんついていた。

上小岩第二小学校の対岸になるあたりにシロネの繁殖あり、大きな(1メートル位)株状態の物もあった。

松本橋北のニセアカシアの樹林の多くが枯死していた。葉のついている樹も葉が黄色になり、枯れるのではないかと思われ、枯れ木の多くは今年芽吹く事は無かったと思われる。水際に生育するので水不足が原因の1つと考えられる。

鹿本橋北でセイヨウワサビ2株確認する。ヌルデの群生もあり。

椿橋南でアメリカスズメノヒエの生息(約2㎡四方)確認。

上記橋から春江橋までの堤防あるいは堤防下に延々とシナダレスズメガヤとアカバナユウゲシヨウが続く。除草の後再発芽した物が多く花穂は少ない。

全体的にヘラオオバコ・シマスズメノヒエ・スギナ・ヒルガオ・イヌクイモ・コセンダングサ・シロザ・ヨシ・オギ・セイタカアワダチソウなどがよく見られた。

以前よく見られたオニウシノケグサ・ススキ・アカザなどは見られなかった。

(渡辺)

5) 秋 (10月12日) 左岸

草刈りをおこなった所が多く、本来の秋草の生態ではなかった。

特記すべきことは

- ①総武線直北辺は、マメアサガオの拡がりが見られ、イチビ・イヌホオズキ・キシウブの拡がりもある。特にホシアサガオは川沿いのフェンスに沿って約30メートル続き拡がりが見られた。
- ②総武線直南側では、川沿いにシロバナサクラタデが辰巳新橋を過ぎた辺りまで連続して相当な拡がりがあり稀。
- ③小岩大橋から下流へ

川沿いにはアレチヌスビトハギの群落、その他にはキシウズメノヒエの群落があり所々にフウセンカズラを確認。イモカタバミ・ランタナ・サルビア・キクなどは植栽された残りと思われる。

ハナカタバミ・ウスベニアオイも数株ありヨメナ・オオホオキギク・シナガワハギ・コマツヨイグサなどを確認、珍しくコシロセンダングサを1株確認。

- ④大杉橋から京葉道路にかけてアオツツラフジ・オランダハッカが多く見られた。他所には無いクサネムを数メートルにかけて確認。アメリカセンダングサが多く見られた。
- ⑤春江橋から下流へ草地は除草されていたがツツジには蔓草が繁茂していた。カラスウリ・ヤマノイモ・アオツツラフジ・ヤブガラシ・ワルナスビが群生している。
- ⑥明和橋下流はシナダレスズメガヤが長く続き生息していた。

全体として、時期を代表するカゼクサ・チカラシバ・エノコログサ・シマスズメノヒエなどが群生するがコブナグサ・チジミザサなど確認できなかった。

ススキ・オオブタクサは以前よりも少ない。さらに、オランダハッカの拡がりも顕著である。

(渡辺)

6) 秋 (10月12日) 右岸

区間①

区境付近に生育するナワシロイチゴは、個体数が減少の傾向である。水辺はヨシやオギに占められて他の植物が入る余地がない状態であるが、金網のフェンスの下にかけてはセイタカアワダチソウ・スギナ・ヨモギ・カタバミ・キクイモなどが生育し、フェンスにはヘクソカズラ・ノブドウ・ヤブガラシ・イシミカワ・ノイバラ・ホシアサガオなどが絡みついている状態である。

ホシアサガオはちょうど開花しており小規模にまとまって生えていた。

河川敷の平らな場所には、シロツメクサ・オオバコ・メヒシバ・カゼクサ・オヒシバなどが優先的に生育している。

なお、以前区境付近の水辺に多く見られたシロネは大変少なくなったが、上一色橋を過ぎた辺りにはかなり生育が確認できたので現状維持が望ましい。

以前から江戸川区唯一の生育場所である上一色橋付近のイヌドクサは増え、安定してきていると思われる。

また、ヒメガマとサンカクイなど本来の水辺の植物は個体数は少ないが、鹿本橋と大杉橋の水辺に確認できた。

江戸川区では珍しくなったススキも十数株生育していた。

小岩大橋を過ぎた辺りのニセアカシアの大木が数本枯れていた。切株の根本からは幼木が育ち、今後の成育が期待できると考えられる。

この区間で、注意すべき植物としてメリケンムグラ(区境付近に生育していた江戸川区新産になるかと思われる)シロネ・ナワシロイチゴ・ホシアサガオ・ススキ・イヌドクサ・ツルマメ・ヤブマメ・シナガワハギ・サンカクイ・ヒメガマなどである。なお、アカメガシワは増えてきているがセイタカアワダチソウは減少してきているようである。

区間②

この区間の水辺は、ほとんどコンクリートの護岸で整備されていて金網のフェンスの下は限られた数種類の植物が見られるのみである。しかし、平坦地の草はらになっている場所にはイヌビエ・オヒシバ・メヒシバ・シロツメクサ・キンエノコロなど乾燥等に強い種類が優占し部分的にハマスゲ・シナダレスズメガヤが生育している状態である。

また、植栽されたオオムラサキツツジの上を這うようにしてヤブガラシ・キカラスウリ・カラスウ

リ・ヘクソカズラなどが見られた。この区間では人為的な影響が大きいため、本来の水辺環境に生育する植物の確認はできない状況である。なお、この区間で注目すべき植物としては減少傾向にあるツタバウンラン、南椿橋付近に散生し、区内では珍しいアカバナユウゲショウ、春江橋付近でやや個体数が多いがあまり知られていないイヌドクサ、ツユクサの白花品種で珍しいシロバナツユクサ・ハタケニラ・キカラスウリ・ウツギ・タケニグサなどである。

(中村)

(2) 野鳥(新中川)

1) 春 (5月18日)

上流

新中川は、3年前・6年前と実施しているはずだが、群で生息する鳥が少なくなっていると感じる。世間でも言われていることだが、スズメの減少が目立つ。

50羽100羽という群がなかなか見られなくなり減少していると感じた。それでもわずかに残された干潟にはシギやコアジサシの姿が見られた。

(飯田)

下流

新中川下流から上流への調査は、鳥類種類・数も少ない中で唯一よかったのは、涼風橋の橋げたでイワツバメの巣作りを初めて確認した。上流へ少し行った所にはイワツバメが飛んでいたなのでこの付近の橋げたに巣を作り増える可能性も出てきた。

(長)

2) 冬 (1月18日)

上流

区境から下流にむかい鳥類調査を行った。河川敷が湖岸工事の為に一部の場所が通行止めだったこともあり種類・数ともに少ない結果となった。

(長)

下流

これまで減り続けていたオオバンが各所に点在していたのが目立った。カワウが魚を追いかける群が見られ300羽を超えるユリカモメが中川をさかのぼる姿が印象的であった。

これまで見られた、ジョウビタキ・ツグミ・カワラヒワなど小鳥類が姿を見せず、水辺が小鳥たちの種類を減らしているように思われた。

(飯田)

(3) 植物(東なぎさ)9月14日

1) 東側

東なぎさの船着場付近の南側はスズメウリ・クコ・ハマヒルガオが多くみられ、コウボウシバやヨシの群落も以前より拡大しているため砂の動きは止められてきているようである。

なぎさの中央部からの先端部へ行くにしたがって、昨年あたりはセイタカアワダチソウの草丈の高いものがヨモギなどに混ざって密生していたが、今回は草丈も低く個体数も減少していた。しかし、以前はなぎさの北側にのみ見られたテリハノイバラが南側にも繁茂していきわめて歩行困難で

あった。なお、その上を覆うようにして、ちょうど花の開花時期を迎えていたセンニンソウやガガイモ・ノブドウが生育していた。

ヨシの繁茂する海水にひたる近くの地面には、スズメウリやキンエノコロの成長の良い物が多く見られた。

上記以外の特記すべき事柄は、小群落が花と果実をつけていたタンキリマメ・数本枯れてはいたが種子を付けていたハマウド・センニンソウ、花と小さな果実を付けていたガガイモ・アメリカネナシカズラとハマダイコンが数株、ハチジョウナも黄色い花を数株つけていた。ママコノシリヌグイ・ツルナは小群落的に昨年より増えていた。

おもな木本植物（樹木類）としては、オニグルミ・アキニレ・トベラ・アカメガシワ・トウネズミモチ・エノキ・ナワシログミ・マルバシャリンバイ・ナンキンハゼ（高さ約7～10メートル・直径20センチ程）・アオギリ・クロマツ（高さ10メートル以上）ケヤキ・ピラカンサスなどであった。東なぎさ中央部から東側半分の範囲に生育する植物の比較的優占種と思われる種類は、コウボウシバ・テリハノイバラ・セイタカアワダチソウ・ヨモギ・ヨシ・キンエノコロ・スイカズラ・ガガイモ・チガヤなどである。

2) 西側

前年と比べて目立った変化はないが、年々種類が減っているように思われる。

飛地の植生も固定化してヨシが大部分を占め南側の一部にホウキギクが群生、その中にウラギクが前年よりは増加（20株ほど）しているようだ。

ヨシの無い部分はイソヤマテンツキが主で、キンエノコロ・ケアリタソウなどが点在していた。種類が非常に少なくなっている。

堤防下の湿地はほとんどヨシに覆われ、他の種類の生息は難しいと思われる。

堤防上はツル植物が多く見られた（ハマヒルガオ・センニンソウ・スズメウリ・ヘクソカズラ・ノブドウ・ガガイモ・アレチウリ）

西端あたりでは、シナダレスズメガヤ・コセンダングサ・アリタソウ・ツルナ・カタバミなどが多く見られた。

土手の上はチガヤ・ヨモギ・メドハギ・コセンダングサ・アキノノゲシなどが主であった。セイタカアワダチソウも以前よりも少なくなったようである。

ススキ・オギ・カヤツリグサの仲間の確認はできなかった。

わずかの草地（船着き場の近くの堤防南側）ではコウボウシバ・ホソバハマアカザ・ハマヒルガオ・ツルナ・コマツヨイグサ・ハマウド・メマツヨイグサ・ハマナス・クコなど海岸の植生環境が見られる場所である。今回の調査で、新たに確認した物は無かった。

（渡辺）

（4）野鳥（東なぎさ）9月14日

アジサシ類が見ることができなかった。

シギ・チドリは多くはなく大型のシギが2～3種見られたが、チドリ類も数が少ない。

（長）

世間では街中のスズメが減っていると話題になり、最近ではテレビでも騒がれるほどになっている。人と近い身近な環境に生息するスズメにとって新しい建物では巣をかける場所がなく、繁殖に必要な条件が厳しくなっているのだろう。もう1点大事なエサは土手を歩いてみて春に咲いた草花が実を付けているまま放置された雑草がほとんど無いこともスズメが減っている要因と思われる。

付近を利用する方や近隣の住民にとっては、きれいに管理された土手は歓迎される所であろうが、垂直護岸の一部が取り壊されアシが植えられたように実の付いた雑草が一部でも残される「遊びの場所」があってもいいように思われた。

新中川にはささやかながら残された干潟になる所が、潮のせいが出ている所が無く、渡りの時期のシギやチドリは1羽も観察できなかった。

東なぎさでは波打ち際が黒いカワウで埋まり、その奥には白いウミネコが陣取り、なぎさを白黒に分けあっていた。すき間を、渡りの途中に立ち寄ったハマシギ・トウネン・チドリ類がエサを求めてチョロチョロ走り回り賑やかであった。強い風にセグロカモメが舞い上がり大きな翼での滑空は見事だった。

何度見ても感動の鳥相豊かな東なぎさである。

(飯田)

【植物】



カモガヤ



カラスノエンドウ



シロツメクサ



コバンソウ

【調査風景】





東なぎさ・鳥類観察